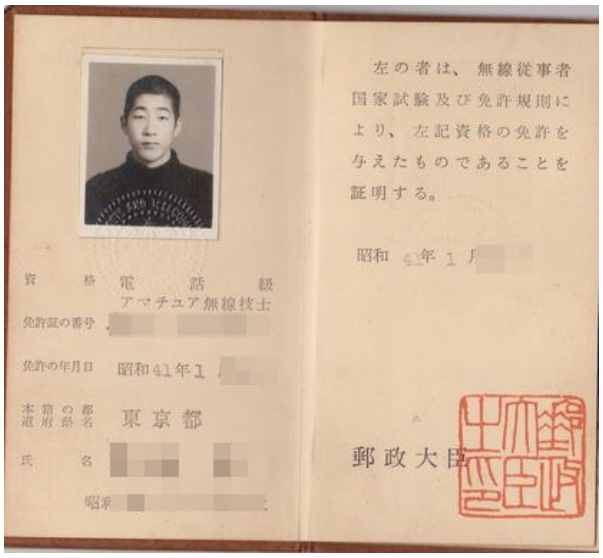
アマチア無線開局 50 年

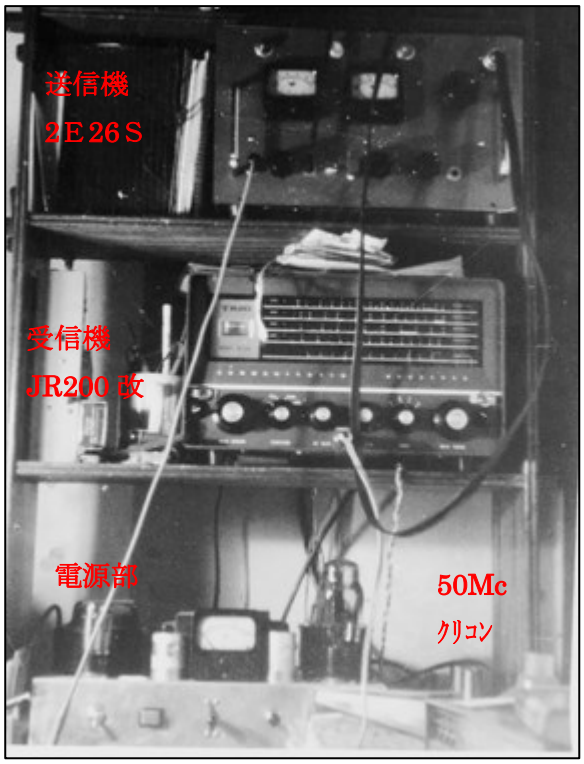
JA1WOB 齋藤　章

1966 年３月 7 日、50Mc の AM で第一声を送信して、今年で 50 年になります。当時は 17 歳の高校 2 年生ラジオ少年でした。
開局当時の事は、この TWO-FORTY 誌で何度紹介していますが、あらためて 50 年前を思い出してみます。
1965 年の 10 月に蒲田の電子工学院で電話級アマチア無線技士の国家試験を受けて 1965 年 11 月に合格通知が来ました。
早速、従事者免許の申請をしました。当時は医者の健康診断書も提出した様に記憶しています。（1965 年は昭和 40 年）
1966 年 1 月に従事者免許が到着して、JARL 保証認定を受ける為に、局免許申請書を持って巣鴨の JARL へ行きました。



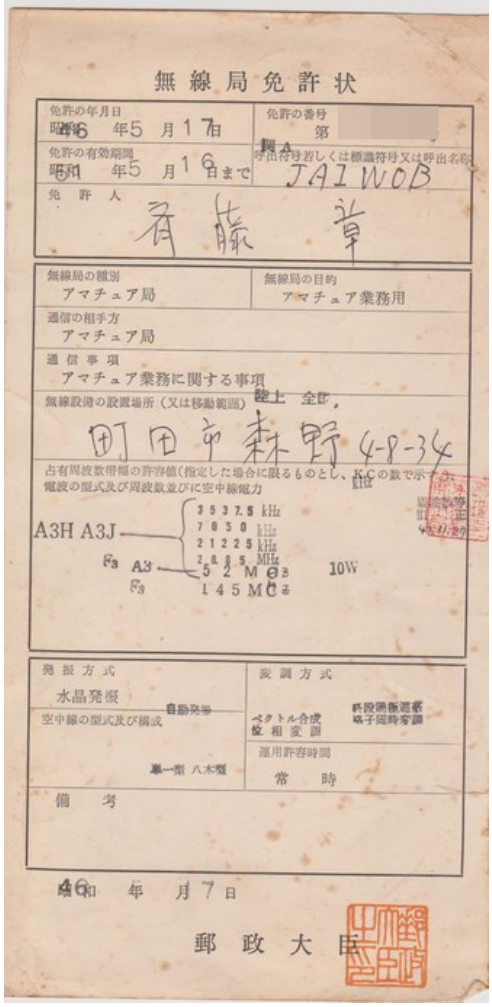
右が手帳タイプの電話級アマチュア無線技士の従事者免許証です。
平成６年に取得した、第２級アマチュア無線技士のパウチッコ従事者免許証と比べると立派ですね。
当時、10W 以下の無線局は JARL の保証認定を受ける事で、無線局の落成検査が省略されました。
当時は、メーカー製の無線機も自作の無線機も、ブロックダイヤグラムを作成して開局申請をしました。
私は、自作の無線機で申請しました。
開局申請してから１ケ月半位の 1966 年３月 7 日に免許状が到着して、開局となりました。
無線機は、既に完成していたので高校のクラブコールを使いテスト電波は出していましたから、局の免許状が到着して早速 JA1WOB で CQ を出しました。
古いログを見ると 3 月 7 日 12：47　JA1YDL とファーストＱＳＯをしています。
最初の免許状は、5 年後の再免許の時に真面目に返却してしましたので、残っていませんが、Ｂ4 サイズ位の大きな免許状で、コールサインと周波数のスタンプと住所と名前が手書の立派なもので、額縁にいれて掲示しました。
無線機の構成は、受信機、送信機、電源部の３部構成になっていました
受信機は、高 1 中 2 に改造したトリオＪＲ２００+50Mc のクリコンでした。

送信機は、リードのＡＳ2 ケースに組込んだ送信部と変調部が一体になったもので８.４ＭＣの水晶発振で、スリーステージ（8.4M　×3×2）で終段管は 2E26S、変調器の終段は 6L6GB のプシュプルでした。
電源部は、この送信部と変調部に供給する為に、裸のシャーシにトランスを２個取付けた重量級のもので、整流管が裸で見えています。
送受信切替用のスタンバイＳＷはこの電源部にありました。
また、アンテナはタニーの３エレを 300Ω の TV フィーダーで給電していました。
送信機と電源部の製作は部品調達を含めて、１ケ月位で作ったと思います、何しろ、学校から帰るとシャーシの穴あけ、と配線に夢中でした、何時も夕食の時間に呼ばれても直ぐに食べなかったし、夜遅くまで、半田鏝を握っていた様に記憶している。



学校から帰ると先ず先に、受信機、送信機の順番に電源を入れてから、学生服を着替えている内に、真空管が温まりスピーカーからノイズが聞こえてきました。
それから、受信機のダイヤルを回して受信を始めるのですが、水晶も２個位で 50.3 ＭＣと 50.7ＭＣ当たりの周波数なので、ＣＱ局がこの周波数近くでＱＲＶしている時は良いのですが、すこしズレタ周波数ではいくらコールしてもコールバックが無く寂しい思いをしました。従って、開局当時はＣＱを出す事が多かったようです。
私と同じ様に、水晶で運用している局もいましたので、送受信離れた周波数でＱＳＯする事も珍しくありませんでした。
ＪＡＲＬ制定のログにも送信周波数と受信周波数が別欄でありました。
開局当時のログを見ると、１日に１局～３局位で、１０分から３０分位のＱＳＯが多く、リグの紹介に時間を掛けて居た様に思います。
また、今のＱＳＯではＱＴＨと名前の紹介は必須項目ですが、当時のログにはリグの記載がメインでＱＴＨは、移動局やＥスポの遠方局が記載されているだけでした。
リグも無線機名は少なく、高１中２とか終段管の８０７とか２Ｅ２６とか 2SC30 など、無線機の構成が備考欄に記載されていました。
特に、名前の記載は少なく、グランドでのアイボールでもサフィックスで呼び合っていた様に記憶しています。無線家だから名前よりコールサインの方が、親しみが

あったようです。
また、テスト電波を出したこともログには、記載されていました、これは「無線局抄録」の提出が義務付けられていた、ためだと思います。
しかし、開局して１ケ月から２ケ月位して、１０W以下の局に対しては免除になりました。従って、無線局抄録の提出は１～2 回だけだったと思います。
アマチュア局が増加して行くなかで、行政も簡略化していったのでしょうね。
関東エリアで、ＪＨ１ＡＡＡが割り当てられた頃です。
　私の運用スタイルとしては、多く局数とＱＳＯするのでは無くて、無線機やアンテナの話をするラグチュー派でした。
それも、前述の様に水晶のみ運用環境では「局数を稼ぐ」事は出来なかったのではかと思います。
そして、開局前のＳＷＬ時代から町田市の地域クラブである、「七国ビームクラブ」に参加してクラブメンバーとも顔なじみだったので、開局後もローカルラグチューが多くを占めて居た様に思います。
開局から数年して、送信ＶＦＯ付のパナ６を使用していましたが、ローカルラグチューが多かった様です。クラブメンバーもラグチュー派、コンテスト派、ＤＸ派、技術派、と別れていたのは、現状のハムクラブと５０年前も変わらない様です。
但し、当時のメンバーは高校生、大学生が中心で中学生や社会人の３０歳代が少々の感じでした。
５０年も経つとハムも高齢化しましたね。
ラグチュー派が集まると、連絡周波数が欲しくなり、町田市の市街局番の０４２７から、５０．０４２７をクラブ周波数にして、水晶を作りました。毎晩、午前様までとりとめも無い話でラグチューを楽しんでいました、今の若い人のＬＩＮＥ感覚でしょうかね。
深夜のラグチューでは、長話のした後にスタンバイすると、次の局が眠ってしまい出てこない事もしばしばありましたが、それもまた楽しい思い出です。
　開局から５年後の免許更新は社会人となって多忙だった為か、免許が失効してしまい、免許年月が昭和４６年５月１７日となっています。また昭和４１年３月 7 日と比べると免許状も一回り小さくなってしまい貫禄がなくなりました。


無線局免許状
免許の年月日 昭46 年5 月17日
免許の番号 第
免許の有効期間 昭51 年5 月16日まで
呼出符号若しくは標識符号又は呼出名称 JA1WOB
免許人 斉藤 章
無線局の種別 アマチュア局
無線局の目的 アマチュア業務用
通信の相手方 アマチュア局
通信事項 アマチュア業務に関する事項
無線設備の設置場所（又は移動範囲） 陸上 全国
町田市森野 4-8-34
占有周波数帯幅の許容値（指定した場合に限るものとし、kHzの数で示す。）
電波の型式及び周波数並びに空中線電力
A3H A3J 3537.5 kHz 7050 kHz 21225 kHz 28.5 MHz
F3 A3 52 MHz 10W
F3 145 MHz
発振方式 水晶発振
変調方式
空中線の型式及び構成 自動発振
ベクトル合成位相変調 終段陽極変調 格子変時変調
単一型 八木型
運用許容時間 常時
備考
昭和 年 月7日
郵政大臣

　その後何度が、再免許を繰り返ししましたが、結

婚・仕事・子育てと多忙な毎日で、年に１０日位のＱＲＶが何年も続き平成２年８月に本格的にカンバックして現在２５年になりました。

今年は、開局５０年になりますが、開局からの５年とカンバックしてからの２５年で実質的には３０年のハムライフです。あと何年続けられるのだろう？開局６０年に TWO-FORTY 誌に投稿したいものです。

現在の無線機は右の写真の様になっています
左上から、
ＴＲ－９３００+ＨＬ６６Ｖ
ＲＪＸ－６０１＋ＨＬ６６ｖ
ＭＫ－６１０　（ミズホ 50M　AM/CW）
ＶＸ－６　ＦＴ－１０４
ＦＴ－８５７　ＦＴ－８１７
ＦＴ６９０ＭＫ2

右下の安定化電源は 40 数年前に自作したもので、RJX-601 や MK-610 の電源です。

おわり